

立てや九百の健男児 (※1)

高理第9回卒 阿部 (齋藤) 祥子 (※2)



相高でのスタートは、何ととっても応援歌練習だ。昼休みと放課後、走って屋上へ駆け上がるとそこには応援団が待っていた。

「遅い！ 弁当なんか食ってんな。早弁してさっさと集まれ！」

高校では、早弁をしなければいけないのだとその時知り、いたく感心した。授業が終るやいなやダッシュするのだが、何故か応援団はいつも先に並んでいて「遅い」とのたまう。どうやったらそんなに早くたどり着けるのかが謎だった。

音程がぶっ飛んだ応援団の歌を聴いて、歌えと言われる理不尽さ。音楽の時間に正しい音程の校歌を練習しても、そんな歌い方で応援団は満足しない。大声でがなるのが相高の校歌なのだ。

「声小せえ、腕立て伏せ！ 腹筋！ セミやれ！」

屋上の金網にしがみついて「ミーン ミーン」と鳴くのが「セミ」で、これが格好悪い。生まれつき声の小さい人は、本当に気の毒だった。

しかし、私は生まれつき声だけは大きい。さらに少数の女子という特権もふりかざし、応援団のお兄さんに、音程がよくわからないので楽譜はないのか等、要求していた。男子に対しては厳しく、女子にはどうしても甘くなる男子先輩。女子で得したと思った瞬間だった。

それでも校歌のフレーズにある「健男児」はかなりインパクトがあった。私達も健男児なんだ…。女が少しいても「健男児」といってはばからない、そんな鷹揚さも相高の良さかもしれない。

演劇部に入部しても女子は一人。一緒に柔軟、腹筋、ランニング、発声をやっていた。ほとんどが1年生、それも同じクラスの男子が多かったので、同志として活動した。時々は気を使ってもらいながら、舞台装置の新聞紙はり等精を出した。「扉」という脚本で演出を担当し、県大会で最優秀賞を獲得した。卓球部と一緒に講堂を使用していたので、照明をあてて舞台稽古を始められるのは、卓球部が終わる7時過ぎ。毎晩9時近くになると教頭が見まわりにきて「早く帰りなさい」と追い出された。大会が近づき切羽詰まり、教頭が来る時間になると講堂の電気を落とし鍵をかけ、皆息をひそめて帰ったふりをする。しばらくたって大丈夫そうになるとまた練習を始めたこともあった。腹が減ると電気コンロでラーメンを作ったり、寒いので講堂のわきでたき火をしたこともあった。この時ばかりは、近所から苦情の電話が学校に入り、教頭が血相を変えて怒鳴り込んできた。みっちり怒られ、以後火気厳禁となった。

好き勝手に学校の中で動きまわっていた相高時代が今の私の核となっている。一浪した後、東北大学文学部を通過し、福島県の国語教師となった。何かあると頭の中で校歌が流れ「立てや九百の健男児」のフレーズが鳴り響く。「質実剛健」なんて言葉もチラチラ出てきて、何だかやれそうな気になってくる。

3校目の赴任先である安積高校で、久しぶりに応援歌練習に臨んだ。その頃はまだ男子校だったので、応援団も気合いが入っている。自分の高校時代とオーバーラップして、やたら感激した。真っ黒な学生服に取り囲まれ自分も高校時代に戻ってしまった。

自由に、溢れるエネルギーにまかせて、好きなことに突き進む。そんな高校生活を送ることができた相馬高校は本当にいい学校だった。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より

(※2) 昭和55(1980)年卒、新地出身。

(転記&※脚注 村山)